



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コンピテンシーとカリキュラム : OECDにおける議論を踏まえて
Author(s)	白井, 俊
Description	北海道大学入試改革フォーラム2019. 2019年6月18日. 北海道大学学術交流会館(札幌). 北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部主催, 北海道大学アドミッションセンター共催
Issue Date	2019
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86345
Type	conference paper
File Information	1_Shirai.pdf



基調講演

「コンピテンシーとカリキュラム ～ OECDにおける議論を踏まえて～」

独立行政法人大学入試センター 審議役

白井 俊氏

(司会)

笠原理事・副学長はこの後所用がありますので、ここで退席いたします。

それでは早速第1部の基調講演に入ります。初めに基調講演として「コンピテンシーとカリキュラム～ OECDにおける議論を踏まえて～」と題しまして、独立行政法人大学入試センター試験・研究統括補佐官（兼）審議役でいらっしゃいます白井俊さんにご講演をいただきたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

(白井)

皆さん、こんにちは。大学入試センター、白井と申します。今日は入試改革フォーラムということですが、私は今入試を担当しています。本日は、入試の内容というよりはこの北海道大学で行われているコンピテンシー評価の前提となるコンピテンシーについての話をしたいと思います。

なぜ私がコンピテンシーの話をするのかということですが、お手元の資料でも配布させていただいています。私は元々 OECDのアナリストという立場でこれまで OECDのコンピテンシーの議論にずっと携わってきました。また、日本に戻ってきてからも、文部科学省で日本政府代表のナショナルコーディネーターとして OECDの議論に関わってきたという経緯がございます。現在個人の立場として関わっているということもありますので、その話を中心にしたいと思います。

今日は大きく分けて、そもそもコンピテンシーとは何かということ。そして、どのようなコンピテンシーに関する議論が行われているかを前半でお話しします。そして、後半はコンピテンシーと



カリキュラム、評価も含めてお話をしたいと思います。

資料は英語の資料をそのまま入れてしまいましたが、適宜解説していきたいと思います。まず、この北海道大学の新しい入試改革のテーマになっていますコンピテンシーというものがそもそも何なのかということです。なかなか日本語の適切な訳が見つからないということもありますが、元々はアメリカ・ハーバード大学のマクレランドの研究です。アメリカ国務省の外交官などが必ずしも学力的に優れた人が職業的に優れていないのではないかと。その差異はどこにあるのかということの研究してきたというのが、このコンピテンシーの議論の一番近いところの始まりだと思っています。元々はやはりビジネスセクター、企業などでどのようなコンピテンシーが必要なのかと、「当社が求めるコンピテンシー」のような形で使われてきました。それは教育の場面で使われることはわりと最近のことだと思いますが、やはり大きかったのは OECDが出したキー・コンピテンシーという概念だと思います。これは2003年で

DeSeCoプロジェクト、後に説明しますが、ここでキー・コンピテンシーということで、これからの未来を生き抜くためにはこういった力が必要だろうということが提案されました。これを皮切りに各国がカリキュラムを変えたりしています。従来のカリキュラムはコンテンツ・ベースであり、例えば微分積分を高校3年生で学ぶといった具体的な内容を決めていました。もちろんそれを否定するわけではないのですが、よりどのような力を付けるのか、ということに注視したカリキュラムに移っていくべきではないかと。それがコンピテンシー・ベースのカリキュラムといった用語として使われるようになりました。

一方でこのコンピテンシーについてはやはりいろいろ課題があります。1つの課題がコンピテンシーには必ずしも定まった定義がないということもありまして、論者によっては結構いろいろな使われ方をしています。例えば、コンピテンシーに近い概念としてスキルとかリテラシーとかクオリフィケーションとかといった、似たような言葉があります。特に20世紀になったところで非常にやったものが「21世紀型スキル」とか「21世紀型コンピテンシー」です。これは皆さんも聞いたことがあると思いますが、いろいろな提案が研究者や国際間などいろいろなところから出てきました。ここでは「21世紀型スキル」と言っているものと「21世紀型コンピテンシー」と言っているものは内容的にはほとんど同じです。同じなのですが、言葉としてはスキルであったりコンピテンシーだったりして用語上の混乱が見られました。

それからもう1つは結構重大な問題です。コンピテンシーとコンテンツ、あるいは教科で学ぶ知識を二項対立的に捉える動きが出てきました。先ほど申し上げたコンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースのカリキュラムに移行していくべきではないのかと。何を教えたかとか何を学んだかということよりも、どのような力を付けたかということを重視しようということです。もちろんそれはそれで良いのですが、それが、コンピテンシーは大事だからコンテンツは要らないのではな

いか、あるいは教科の細かい知識はもうどうでもいいのではないかということです。ちょうどGoogleなどがかなり出てきた時期でしたので、細かい知識はGoogleで調べれば一瞬で分かるでしょう、そういうことをやっても意味がないのではないか、という議論が一部ではやったこともありました。これは後に述べますが、正しくない判断だと思いますけれども、こういう二項対立的に捉える傾向が一方では出てきました。

DeSeCoはプロジェクトの名前です。Definition and Selection of Competencies。コンピテンシーの定義と選択プロジェクトというのがこのOECDのプロジェクトの名前でした。このDeSeCoプロジェクトにおいて定義をされたのがキー・コンピテンシーという概念です。ここで示す3つの大きな力が必要になってきます。自立的に行動する力。それから、道具を相互作用的に使う力。他者との関係において使いこなす力。それから、多様な集団で協働したり作業したりする力。こういうことが大事になってきます。そして、その中心にあるものがReflectiveness。反省性とかと言っていますが、今の言葉で言えばメタ認知みたいなことに近いと思います。このようなFrameworkがDeSeCoで示されました。

キー・コンピテンシーと定義していますが、そもそも何のためのプロジェクトなのでしょう。もう一回これを振り返ってみたいと思います。DeSeCoのキー・コンピテンシーを策定しようとしたきっかけ（Key question）ですが、われわれが将来SuccessfulでResponsibleな生活、成功して責任ある生活をしていく、それから、現在あるいは未来の課題に直面して対応していくためにどのような力が必要なのかということをもみんなで考えようということです。

ちょうどその当時このDeSeCoプロジェクトの最終報告が出たのは2003年ですけれども、2000年からPISA調査が始まっています。PISA調査をOECDが行っていく中で新しいリテラシー概念といったものが出てきたのですが、一方では批判も

ありました。その批判とはPISAというものが一定の学力を測定しようとするのは分かりますけれども、それが本当に正しいものなのか、理論的にどういう根拠に基づいているのかということで批判もありました。OECD側でもそういった批判を想定していましたので、まさにこのDeSeCoプロジェクトはPISAの国際比較調査を補強するものです。国際調査に理論的な根拠を与えるものとして作業していたという意味もあります。

このDeSeCoの中身に入っていきたいと思えます。DeSeCoで大事にされていることの一つがHolisticなapproachということです。Holisticとは包括的とか全体的というという意味になると思えます。Goncziというオーストラリアの学者がいます。彼が言っていることはやはり二項対立的な部分でいろいろなこと、例えば精神対肉体であったり、理論対実践であったりとか、心と体とかいろいろなことが二項対立的に捉えられがちな傾向がありますけれども、やはりそこから脱却することが大事だということです。ここで言われているのがRelational, integrated, and holistic approach to competence。それを相互に関係づけたり、統合したりして、コンピテンシーを包括的に考えていく必要があります。例えば知識とか認知的なスキル、実践的なスキル、社会的・情意的なスキル、態度とか価値観といったものを統合的に使っていくことがコンピテンシーの重要な部分なのではないかということを言っています。

実際にDeSeCoのコンピテンシーの定義というものがあります。ここに結構重要な言葉がたくさん出ています。「The ability to successfully meet complex demands in a particular context through the mobilization of knowledge, skills, attitudes and values」と言っています。ここで着目したいものはこのMobilisationという言葉です。モビライズですので、いろいろなものを動員してくるようなイメージだと思います。自分が持っている知識であるとか、スキルとか、他者を尊重するような態度だったり、あるいは重要な価値観といったものを総動員して使います。あたかも引き

出しの中から必要なものを取り出して、その場で必要な力を発揮していくことをコンピテンシーと言っています。

もう1つ大事なのはここで言っていますが、in a particular contextです。特定のContext、文脈においてどういうものが必要になるのか。要はTPOに合った、場面に合った力を発揮していくということです。例えば現在プログラミングのスキルが非常に重要だと言われています。極端な話ですけれども、例えば無人島で暮らしていくためにプログラミングのスキルがあっても仕方がないわけです。やはり場面に応じた力がどうしても必要になってきます。これがコンピテンシーの重要なポイントです。Mobilisationに象徴されるように統合的に使っていくこと、知識だけを持っていても仕方がありませんので、それを認知的なスキルとか社会的なスキルと一緒に使っていくこと。そして、そのContext、場面に応じて使っていくこと、その2つがコンピテンシーの重要な概念だと思います。

コンピテンシー自体はいろいろな場面で無限大に想定されます。ここでOECDがやろうとしていたことがその中でキーとなるもの、重要なものを抽出していくという作業です。では、それをどのように判断するのかということです。OECDの基準としてはここにあるようなことを立てています。まず、学習可能であること。要は先天的に人々が持っている性格とかのようには変えられないというものではなくて、学んだり、教えたりすることによって変わるようなもの。次に、様々な文脈における重要で複雑なニーズを満たすために役立つこと。Contextという話を先ほどしましたが、1つのContextは非常に特有なContext。例えばプログラミングが必要になる場面、あるいは逆に無人島での生活というような特殊な場面ではなくて、さまざまな文脈において重要で複雑なニーズを満たすために役立つもの。ある意味汎用（はんよう）性があることです。そして、私だけではなく、誰にとっても重要であること、メタ認知など高次なスキルを含むこと、そして、社会的に高

い価値が認められるような結果につながることを一つの基準としています。

全体的にはどのような場面でも誰にとっても汎用性が高いようなものを注視していきましょうという考え方です。

ただ、例えばこの社会的に高い価値といっても、それはかなり価値判断を含むものになっています。どうしても価値判断でベースになるのは社会経済的、文化的Contextということになってしまいますので、これは国によって実際に違います。例えば民主主義が大事だといっても、日本における民主主義とほかの国における民主主義は捉え方が違うかもしれません。そういうときに何を大事にするのか、どのような価値があるのかということについてやはり一定の規範が必要になります。DeSeCoの場合には国際的な条約とか協定、例えば世界国際人権宣言だとかリオ環境宣言といったようなものを使って、要はみんなが認めるような規範を基に考えていこうというアプローチを採っています。

また、同時にこれは哲学者のインプットでもあるわけなのですが、一般的に考えられる良い生活、Good lifeを送るためには、ごく一般論ですけども、他者との良好な関係を築く。自己や自己の世界について理解する。自分の置かれている社会的環境との自律的な関係を構築する。達成感や楽しさ、といったような普遍的な部分を大事にしていこうということを考えています。

こういったことを基にして先ほどの図で掲示をしましたこの3つの領域が特定されているということになります。これはあくまでキー・コンピテンシーです。コンピテンシーはたくさんあります。本当にいろいろな、大して役に立たないコンピテンシーもありますけれども、キーでないコンピテンシー、コンピテンシー全体像を示すとこうなってきます。その中でキーになるもの、それを抽出したものがこのDeSeCoのキー・コンピテンシーということになります。以上が2003年までの議論になります。

この見直し作業を実は2015年にOECDにおいてスタートしています。そのプロジェクトの名前が「Education 2030」です。これはDeSeCoの定義されたキー・コンピテンシーをもう一回見直して、2030年に必要となる力とはどういうものかを考えていこうというプロジェクトです。

DeSeCoのコンピテンシーはそれなりに社会的な影響がありました。コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースということで各国でもカリキュラム改革が2000年代初頭から2012年代にかけて行われました。ニュージーランドはキー・コンピテンシーをベースにしたかなり根本的なカリキュラム改革を行いました。オーストラリア、シンガポール、それから、韓国、日本といったような国でコンピテンシーを注視したカリキュラムにどんどん変わってきています。新しい日本の学習指導要領も資質・能力の3つの柱ということで、まさに発想としてはコンピテンシー・ベースに近づいていこうということになります。ただ、ここで言っているコンピテンシー・ベースは決してコンテンツを重視しないということではなくて、従来はどちらかという、どのようなことを教えるのかとか、どのようなことを学ぶのかということにフォーカスしがちでした。それを最終的にどのような力を付けたのかという方向に振っていきましょうということによって理解していただければと思っています。

このDeSeCoのキー・コンピテンシーはなぜプロジェクト「Education 2030」で見直しをしているのでしょうか。DeSeCoはいろいろ課題もありました。基本的に非常に抽象的ですので、それ自体を批判するという感じではないと思います。逆に理論的、抽象的過ぎていました。例えばわれわれのような政策立案者であるとか学校の先生方がうまく使えない、理念としては分かりますけれども、実際どうしたらいいのかというところがなかなか分からないという話があります。実際にドミニク・ライチェンやローラ・サルガニクなどの研究者が中心での策定になったということがありまして、やはりそれも非常に理論的なものになって

しまっています。さらに、特定の国による参加ということで、このDeSeCoは12カ国だけなのです。参加しているのはヨーロッパとアメリカ、オーストラリアというどちらかという、アングロサクソン系統の国々が多いということで、アジアの国は1カ国も参加していません。

ですから、国際的にもバランスが取れていない部分があります。そして、2003年から15年ぐらいたっているわけですが、その間でAIとかIotとか移民の急増など急速な社会変動が起きているのではないかと。こういった部分も踏まえて、もう一回DeSeCoの見直しをしようという議論をしています。

いきなり結論といいますか、最終像になります。この図は5月に作られたものですが、
「Education 2030」の最終的な姿になります。これはデザイン会社に頼みましたので分かりやすくなってはいますが、これをどうやって読んでいけばいいのかがなかなか難しいと思いますので、今日はそこを解説したいと思います。名前が「Education 2030 Learning Compass」と呼んでいます。Learning Compassというのは、要はこれからの時代はよくVUCAと呼ばれていますが、何が起るかわかりません。ますます不確実性を増していく世の中で、子どもたちはどのようにたくましく生き抜いていけばいいのかと。それをナビゲートするコンパス（Compass）です。まさにどちらに行くのかと子どもたちが判断する中でのコンパスとなるようなものを作っていこうということで一つのメタファーということでLearning Compassという呼び名にしています。

実際にコンパス状に似せてデザインしています。これを解説していきたいと思っています。この図に至るまでにいろいろな議論の経過がありました。何回もビジュアルデザインが変わってきているのですが、これの直前のものが少し分かりやすいかと思っています。こちらの1つ前のビジュアルで説明していきたいと思っています。この「Education 2030」のFrameworkです。この点は、DeSeCoに

おいては必ずしも具体的ではなかったのですが、何を指すのかと。力にコンピテンシーを付けて何を指していくのかと。そこを明らかにしていこうとしました。そこではWell-Beingだと定義をしています。Well-Beingは日本語にしにくいのですが、誰もが良い状態であること。実はOECDの中ではWell-Beingに関するインディケータのようなものを作っています。これもある意味で社会共通の、例えば安全に生活できるとか、きちんとした収入があるとか、健康であるとかいろいろな要素があるのですが、そういったWell-Beingを達成していくこと。それも個人レベルだけではなくて世界レベル、Societalなレベルでも達成していこうではないかと。そのためにはどのような力が必要なのかということを考えていくわけですが。考えていきますと、ここでは扇風機の羽根状になっている部分です。将来2030年にAIが普及したり移民がどんどん増えていく中で必要になる力として、例えば新しく価値を創造する、Creating New Valueや、あるいはTaking Responsibility、一人一人が責任ある行動を取っていくと。Tensions & DilemmasをReconcileする力。Tensionsとは緊張関係とか対立関係、Dilemmasをうまく調停して調和していくような力。こういったことがこれからの時代においてはますます求められるようになるだろうということです。

問題は、ここからです。とはいっても、Creating New Value、新しい価値を創造する力が大事だということ自体はそれほど反対はないと思いますが、それはどうやって付けるのかと。そもそもその力は何ですか、ということが次の疑問として出てきます。OECDのプロジェクトの中で民間の機関や国際機関などがいろいろなものを収集して一回全部を風呂敷の上に要素分解したものをしています。それがこちらの左になります。知識、スキル、態度・価値観（Attitudes and Values）の3つのドメインがあります。全部を広げて要素分解をしますと、このように分かれていきます。この分かれたものをもう一回逆から戻りますと、例えば新しい価値を創造する際に例えば教科で学ん

だ知識と認知的なスキルを活用して、その場面ごとに発揮していく、例えば他者を尊重する態度。それらを織り交ぜながら場面ごとに応じて新しい価値を作っていくことがコンピテンシーということなのです。冒頭でDeSeCoのコンピテンシーには統合的な性格があると申し上げました。まさにその場面ごとによって、例えば知識でもいろいろなドメインがあるわけですが、こういう知識、それから、こういうスキル、こういう態度。それを場面ごとに応じてらせん状に発揮していきます。それによって新しい価値が創造されていくとか、あるいは対立関係を調停するとかが可能になっていくのではないかと思います。

こちらの図のほうが少し分かりやすく出ています。

ちなみに、後ほどご紹介しますが、日本の新しい学習指導要領は基本的にこのFrameworkに非常に近いものになっています。3つの知識・能力の柱と言っていますが、知識・技能の柱に近いですし、こちらは思考力、判断力、表現力の柱に近いです。こちらは学ぶに向かう力・人間性の柱に近いという仕組みになっています。

これを一回見ていただいた上で先ほどのこの図を解説していきたいと思います。このLearning Compassは非常に多層的な構造になっています。ですので、それを読み解いていきたいと思うのですが、ゴールがこのWell-Beingです。このコンパスを使いながらこのWell-Beingを達成していくというものがメタファーなわけです。この中身に入っているものが具体的にコンピテンシーをどう付けていくのか。どういうコンピテンシーが必要なのかということが入っています。中心のこの針の部分が先ほどの3つのドメイン、知識とスキルと態度・価値観です。それを取り巻いているものがこの一番近い層でFoundationsです。基盤的な力です。さらにその外枠にあるのがTransformative competenciesと呼んでいますけれども、変革をもたらす力ということで、先ほど

の新しい価値を創造するとか紛争、緊張関係やジレンマを調停する力といったものが入っています。さらにその外円にあるものが後ほどご説明しますけれども、AARサイクルです。Action、Anticipation、Reflection。思考のプロセスみたいなものを入れています。さらに、ここにAgencyという言葉があります。Agencyも非常に訳しにくい言葉なのですが、生徒が主体的に責任を持って行動していくような力になります。

たくさん情報が入っていますので、また一つ一つ説明していきたいと思います。先ほど申し上げた要素ですが、6つぐらいあります。まず、目標となるのがWell-Being。それから、コンピテンシーを使っていきますと、2030年に必要になるだろう力がTransformative competencies、変革をもたらす力です。その基盤となるものが基盤的な力。読解力とかリテラシーみたいなものです。さらにそれを要素分解していったものが先ほどの知識とか認知的なスキルとか態度・価値観みたいなものです。これらを動かしていくものがAAR Cycle、アクション、アンティシペーション(anticipation)、リフレクション。日本語にしますと、見通し、行動、振り返りのサイクルです。最後の原動力になるのがAgencyということになります。

まず、この「Education 2030」のコンピテンシーに関する定義です。これはDeSeCoと非常に近い形になっています。コンピテンシーとは単に知識やスキルではないと。それを超えたものです。そこに含まれているのがIdentify, select and mobilize knowledge, skills, attitudes and valuesですので、いろいろな知識とかスキルとか態度・価値観みたいなものをやはりここでMobilizeという言葉が出てきます。動員したり、あるいはIdentify、特定して選んで、そして、必要なものを持ってくる力。どういう知識が必要なのか。その場面ごとに応じてということ。最後にやはりこのin a particular contextとなります。やはりその場面ごとに応じて、ここではこの問題を解決するためにはどういう知識が必要だとか、こうい

うスキルが必要だとか、それを特定して自分でそれを持ってくる、使ってくる力です。これが「Education 2030」におけるコンピテンシーの定義ということになります。単に知識があるとか、単にスキルがあるということだけではコンピテンシーとは言えないという意味でもあります。

まず、先ほどの6つのテーマに沿って1つ目、Well-Beingについてです。Well-BeingはOECDでインディケータがありまして、先ほど申し上げたように健康であったり、ワークライフバランスであったり、教育だったり、社会的な関係、連帯関係とか収入などいろいろな要素があります。こういったものを達成していくことです。それも個人レベルだけではなくて、社会全体レベルで達成していくことで個人が社会に還元にして、社会が個人に還元できるという良いサイクルができるようになります。これが大きな目標です。

その次にThree domainsです。これは知識としてここでは4つ挙げています。教科の知識。それから、教科を横断するような知識。Epistemicな知識。それから、手続き的、Proceduralと言っています。教科の知識、教科の横断的な知識というのはある程度分かると思いますが、Epistemicな知識とは何だろうというものがあります。Epistemicとはたぶん先生方には見方・考え方という意味が一番近いと思います。要はものの見方に関する知識のことです。OECDの説明でよく使っていますが、要は歴史家だったらその問題をどのように考えるのかとか、数学者だったらその問題をどのように考えるのかということに関する知識をEpistemicな知識と呼んでいます。まさに専門家で例えば同じ環境の問題ならば生物学者が見る視点と政治学者が見る視点とはたぶん全然違うと思います。やはりそれぞれプロの見方があると思います。そういうプロの見方を学校教育の中できちんと教えてほしいということが新しい学習指導要領に入っている見方・考え方の概念となるわけです。そういう知識、どのような見方・考え方をするのかということに関する知識と理解して

いただくことが近いのではないかと思います。

Procedural、哲学的な知識。これはどちらかというと、デザインシンキングとかシステムシンキングといわれているものが一番イメージしやすいかと思います。要はいろいろな思考のパターンとか考え方に関する知識となります。デザインシンキングとは例えば元々は企業の経営の見直しから出てきた考え方です。よく企業の研究所みたいなところで新しい製品開発をしていると。製品開発をして、できたものを最終的には営業部門が営業して消費者に届けるわけですが、ありがたいことは企業の研究機関というのはやはり消費者から一番遠いところにあります。消費者から一番遠いところにいる人たちが消費者に売するための製品を作っています。そこに大きなギャップがあるのではないかと。それをいかに接近させるか、ということのために作られたものがデザインシンキングの考え方です。プロトタイプを作って消費者に意見をフィードバックしてもらい、それを製品開発に生かしていくとかいろいろな手続きのやり方に関して提案していますが、そうした思考のパターン、考えるパターンに関する知識というものがここに入っています。

それからスキル (Skills) です。まず認知的、そして、メタ認知的なスキルが入っています。メタ認知についてはご案内のとおりだと思いますが、自分の置かれている状況を客観視するような力です。これも新しい学習指導要領の中で特に学習評価のところにおいては非常に重視されています。

それから、社会的、情意的なスキル。自分の感情をコントロールするとか他者との関係を担っていくようなスキル。実用的身体的なスキルというものもスキルに入ってきます。それから、態度です。態度は日本語で言っている態度に近いと思いますが、振る舞いといったところです。

それから、Values、価値観です。いろいろな価値観があると思いますけれども、個人レベルからのものから社会レベル、そもそも人道的な部分とかいろいろな価値観が入ってきます。こういった

ものが要素分解していった細かい分類となります。

これらを組み合わせていきますと、Core Foundations、次の図の基盤的な力になります。この基盤的な力として挙げられているのはやはり認知的な基盤。Literacy、読解力と言っていいでしょうか。それから、Numeracy、数字に関するスキルです。それから、Digital literacyが現代では重要になってくるということでここに入っています。

健康面の基盤ということで、身体、精神面での健康、Well-Being。Social and emotional foundations。社会的、情動的な基盤ということで、ここには例えば道徳観とか倫理観みたいなものが含まれるということになります。

また、新しく必要になってくるContext-specific、即ち特定の場面で必要になるコンピテンシーもあります。例えばFinancial literacyとかGlobal competency、Media literacyです。こういったものもこういうベースの上に作られていくだろうということが言われています。

例えばこのFinancial literacyに関しては面白い話があります。少し前に欧州で金融危機が起きました。その時にいろいろな国で金融教育が足りないと、例えばファイナンスとか、ファイナンシャル・エジュケーションみたいな教科を慌てて作った国が結構ありました。ちょうどOECDにおいてFinancial literacyに関する調査をして面白い結果が出てきました。慌てて金融教育みたいな教科を作った国とそうではない国を比較した場合に後者のほうの学力が全体的に高くなりました。例えばきちんとした認知の基盤みたいなものがあれば、いろいろな新しい問題は出てくると思いますが、そういった問題についても十分に対処し得るのではないかという一つ概念があります。

次にTransformative competenciesです。先ほどのコンパスの中で外側にきています。2030年に向けて変革をもたらしていくようなコンピテンシーというのがここに3つ挙げられています。Creating new values、新しい価値を作ります。

それから、緊張関係、ジレンマを調停するような力、責任のある行動を取っていくような力です。こういったものがAIの普及や移民が急増する社会において、より重要になってくるだろうと言われています。

こういった力をどのように伸ばしていくのかに関するコンピテンシーの発達に関するプロセスがAAR cycleというものです。Anticipation、見通しとか予測です。これは当たり前の話ですが、何か行動する前に当然予測をします。予測をしてどういう結果が出るのか、どういう帰結が起こるのかということを考えます。そこでかなり高度な認知的なスキルが必要になりますので、Anticipationする力。実際にAction、行動する力。行動した後で反省、ReflectionすることがAARです。Anticipation、Action、Reflectionを繰り返すことによってコンピテンシーの発達につながっていくだろうということです。これを日本語では見通し、振り返りということで学校教育ではかなりなじみのある言葉だと思います。ここで言っているのは学校教育で指導上の工夫というよりは力のほうです。子どもたちがこういう力を付けていくことが生涯学習的に見たコンピテンシーの開発に必要なだろうと言われています。

最後がAgencyです。最初のコンパスの図では子どもたちが自分で動いていくような姿として描かれていました。このAgencyはかなり重要な概念になっていますけれども、どういうことかといいますと、英文で長くなっていますので日本語にしました。「自ら考え、主体的に行動して、責任を持って社会変革を実現していく力」としています。例えばそこに入っていくものは将来的な目標を見据える力、ゴールセッティングの力、クリティカル・シンキング・スキル、現状に疑問を持つ力です。こういったことがこれからの子どもたちにとって非常に重要になってくるのではないかと、ということです。よく近い概念としてあるものでは「子どもたちの主体性重視」「子どもたちがやっているのだから、それを尊重してあげましょう」という感じのところがありますが、これはそうで

はなくて、重きが置かれているのは責任のところなのです。要は子供たちがやりたいからやっていますということではないということです。そういうことを求めているのではないと。やはり2030年の未来を築き開いていくためには子どもたち自分自身がどういう社会的責任を負っているのかを十分に分かった上で、主体的に行動して社会変革を実現していく力が必要になります。生徒が自分で勝手に判断している、自分だけで判断している、自分の好き嫌いで判断しているということでは全くないことになります。責任を持った上での主体性です。その概念がAgencyということになります。以上が大きな枠組みになります。

先ほど申し上げたように、この3つの要素は日本のカリキュラムにおいても各教科においてきちんとビルトインされています。それから、これは昔から使っている資料ですけれども、総合的にカリキュラムを捉えて構造化しています。まさにトライアングルなのです。この3つの資質能力を統合的に活用していくということが本来の学習指導要領が目指すところになります。知識・技能。確かに指導要領の記述としては「ここで必要な知識はこうです」と、「思考力はこうです」という書き方をしていますが、本来それらは統合的に使われて、かつ、その授業の場面や教科の学習場面で、というContextにおいてどういう力が必要なのかということを考えていくことが必要になってきます。

この3つの柱はまさに今進んでいる高大接続改革においても共通する話です。学習指導要領において、この資質・能力の3つの柱がありますが、入試などを中心とした高大接続改革でも同じような概念になります。少し古いものになりますが、「学士課程教育の構築に向けて」という平成20年の中教審答申でも書かれていることもだいたいこの3つの要素になってくると思います。こういったものも当然個別に知識・技能を付けるということではなくて、統合的な文脈に基づいて使っていくことが求められていると思います。以上がコンピテンシーの今の状況になります。

後半の残された時間ではコンピテンシーとカリキュラムについて少し触れておきたいと思います。OECDの「Education 2030」プロジェクトはDeSeCoが理論的過ぎたという反省から具体的に例えば指導法とかカリキュラム開発とか評価についても議論していこうとっています。こちらはまだ途中の部分もありますが、そのときの考え方としてカリキュラムの3段階論という考え方があります。カリキュラムを普通に言いますと、日本では学習指導要領と想定されがちです。従来やっていることではありますが、意図されたカリキュラム、実施されたカリキュラム、達成されたカリキュラムという見方をする考え方があります。意図されたカリキュラムとはいわゆる政策立案者が作るカリキュラムであって、その内容はきちんとしたものになっていることが求められています。ただ、このカリキュラム、学習指導要領がどんなにいいものであっても、実施するのは先生方です。先生方は、どんな先生を採用しているのか、研修しているのか、どのような指導をしているのか。あるいは先生方を取り巻く環境です。働き方の問題であるとか教科書・教材の問題だとかいろいろな問題もあります。さらに先生がどんなにいい指導をしても、それを受け止める生徒の評価ということになります。どこまでの力が付いているのかです。それは授業を通した例えば総括的、形成的な評価もありますし、標準化テストによる評価もあります。あるいは入試というものも評価の重要な側面であるということが言えると思います。

これを図にしたものが次のスライドになります。どんどんギャップが生じてくるわけです。カリキュラムとしてはこれぐらいのレベルで作りましたけれども、実際には先生方が忙し過ぎるとか学校への要求が多過ぎるといったような外在的な事情でこうなってしまいました。そして、先生が教えても生徒は必ずしもそうでもないかもしれません。こういうギャップが生じてしまいます。ここをどうやって埋めていくのかということが大きな課題になります。

今日は時間がありませんので、資料で最後の評

価のところだけをお話しさせていただきます。「新学習指導要領に基づく評価の基本構造」という図があると思います。指導要領ではこの資質・能力の3つの柱が明記されています。これを観点別学習状況で評価していくことが高等学校においても、今も求められています。これからますます求められるようになってきます。知識・技能、思考・判断・表現。そして、主体的に学習に取り組む態度。これらの評価していくことが必要になってきます。感性とか思いやりのような数値的な評価がなじみにくいものについては個人内評価をしていくのが基本的な評価の構造となります。

この評価の議論をする前にいろいろと中教審でも意見聴取を行ってきました。

高校生に対して意見を聞いたことがありました。高校生、新社会人の順で大学生もいます。その時の偽らざる声ということです。やはり先生方の評価について、授業内でもテストのタイミングでどういう点が良かったのかという一言だけでも欲しかったという声。通知表の数字だけ示されても分からないので中身をもっと知りたいという意見。これはひどいケースですが、授業中に寝たらマイナス1点、発言したらプラス1点というような評価があったということです。これは能力があるということではなく、真面目に授業を聞く子、積極的に発言する子が評価されてしまう。それらを意欲として評価するのは評価の正当性に欠けているという意見。これらは「なるほど」という感じのコメントです。ここをどのように解決したらいいのかの評価の大きな論点の一つでした。従来では小中学校では関心・意欲・態度ということで評価を熱心にしてきました。先ほどからコンピテンシー、統合性の理論に関するのですが、ありがちだったものでは勉強がすごくできないと。知識・技能の観点でも思考力・表現力の観点でも非常に低いと。ただ、真面目に頑張っただけで宿題は忘れずに出すとか、そういうような子に対して態度の部分で良く評価することが往々にしてありました。言ってみればC、C、Aみたいな評価です。

あるいは逆のものでは勉強はできますけれども、態度がすごく悪いのでA、A、Cにするということもありました。これをどうしようかということなのですが、やはりこれだけを切り出して評価するというのはおかしいだろうということです。逆にそこだけを切り出してしまいますと、本当に授業中に手を挙げてプラス1点とかといった表面的な態度になってしまいます。そういうことをやめましょうということです。では、ここで評価しようとする主体的に学習に取り組む態度とは何だろうということ考えた際に、粘り強く取り組む側面と、それから学習を調整しようというメタ認知の側面を評価していこうということになりました。それを示したものが次の図です。

これは意図的にカーブを変えています。主体的に学習に取り組む態度を評価する際にA、B、Cをどのように評価するかということを考える際に粘り強く学習に取り組む態度はそれはそれで大事ですけれども、それだけをやっているだけでも駄目でしょう。やはりメタ認知をして自分の学習を改善していくような部分がこれからは大事になります。逆に、ただ粘り強くやっているだけでAとすれば、その人はずっと粘り強くやるかもしれませんが、いつまでも成績が上がらないことになるかもしれない、ということでこういうカーブにしています。

最後に「児童生徒の学習評価の在り方について」ということで、北海道大学が検討される際に参考にする部分になると思いますので抜粋しています。大事なことは評価をする際に児童生徒をどうということの評価するのかを共有していくということです。先生が一方向的に陰で評価するだけで、子どもたちがどう評価されているのか分からないということではなく、評価の方針・方向性みたいなことを事前に共有することが大事です。それから、記録を集めることはもちろん大事なのですが、当然指導しなければいけません。先生は判定者・評価者ではなくて指導者ですので、やはりそこは形成的に評価していくことです。それから、どこまでの範囲を評価するのかということです。先生方

が全部を把握することは無理ですので、少なくとも学校外の活動、子どもたちが自分でやっている活動については別の形で大学は把握したほうがいいのではないのでしょうかということをこのレポートの中で言っています。

ちょうど時間になりましたので、これで終わりにしたいと思います。このコンピテンシーに関しては国際的な議論の積み上げがかなりありました。前半は抽象的な議論に終始しましたので退屈だったかもしれません。この大きな国際的な議論の流れを踏まえて今の学習指導要領ができています。そして、学習指導要領を踏まえて新しい学習評価の考え方もできているということになります。その流れだけでもつかんでいただければと思っています。それでは、私からは以上で終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

(司会)

白井さま、どうもありがとうございます。ただ今の基調講演に対してご質問等については受付の際にお渡しした質問表にご記入をいただいでご準備していただければと思います。よろしくお願ひします。ただ今準備をしていますが、第2部の現状報告に移らせていただきます。

コンピテンシーとカリキュラム

～OECDにおける議論を踏まえて～

(独)大学入試センター試験・研究統括補佐官(兼)審議役

白井 俊

白井 俊

2000年 文部省入省
 2009年～2012年 徳島県教育委員会(学校政策課長、教職員課長、教育総務課長)
 2012年～2015年 文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐
 2015年～2017年 経済協力開発機構(OECD)教育スキル局アナリスト
 2017年～2019年 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長
 2019年～ (独)大学入試センター試験・研究統括補佐官(兼)審議役

1. コンピテンシーとは何か

- i. これまでの議論の整理
 ～DeSeCoに関するD. Rychenの考察を中心に～
- ii. OECDにおける最新の議論

2. コンピテンシーとカリキュラム

- i. “Intended Curriculum”の側面
- ii. “Implemented Curriculum”の側面
- iii. “Attained Curriculum”の側面

• コンピテンシーとはそもそも何か？

～マクレランドの研究～主にビジネスセクターで使用～

～「キー・コンピテンシー」概念が定義された2003年前後から、教育分野においても急速に普及

- E.g.「コンピテンシー・ベース」のカリキュラム

• コンピテンシーに関する問題

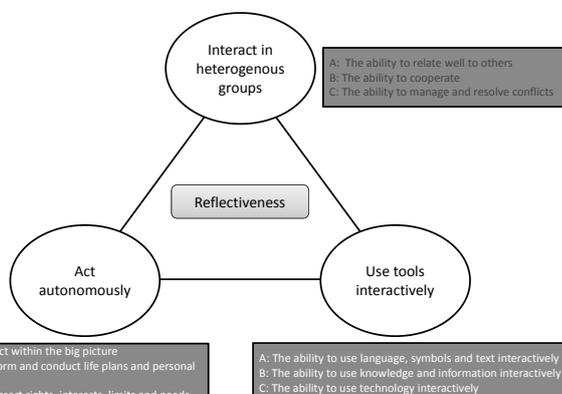
～論者によってコンピテンシーの定義が異なり、用法に混乱も見られる

- スキル？リテラシー？クオリフィケーション？
 - 「21世紀型スキル」「21世紀型コンピテンシー」は同じもの？違うとすれば何が違う？

～コンピテンシーとコンテンツや知識を二項対立的に捉える動きも

- 「コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへ」
- とりわけ、コンテンツに関する知識をコンピテンシーと二項対立的に捉える傾向

The framework of DeSeCo key competencies



The Definition and Selection of Key Competencies Executive Summaryに基づいて作成

- そもそもDeSeCoとは何のためのプロジェクト？
 - DeSeCoのkey question

“What competencies do we need to lead a successful and responsible life and to face the challenges of the present and future?”
 - PISAなどの国際比較調査を補強するもの。コンピテンシーとは何か、どのコンピテンシーが重要なのか、そもそも何のために重要なのか、といった問いに答えるもの。
 - 包括的で理論的なキーコンピテンシーを特定し、PISAなどの国際調査に理論的な根拠を与えるもの。生涯学習の視点から、重要なコンピテンシーの育成のための基準を与えるもの。

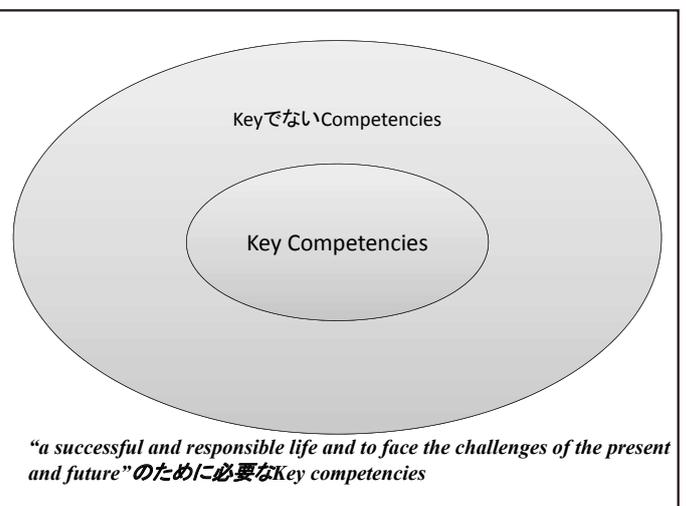
- Holistic approach
 - Goncziの指摘
 - 二項対立的な発想がギリシア以来の現代の教育についての考え方にも残っており、それからの脱却が必要
 - Mental vs Manual
 - Theoretical vs Practical
 - Mind vs Body
 - “In line with Weinert (2001) Gonczi (2001) argues for a relational, integrated, and holistic approach to competence: One which links the attributes of individual (i.e. knowledge, cognitive, practical and socio-emotional skills, attitudes, values) to the demands and challenges which individuals encounter in the context of work and in life.”

A competence is defined as *the ability to successfully meet complex demands in a particular context through the mobilization of knowledge, (cognitive, metacognitive, socio-emotional and practical) skills, attitudes and values.* (DeSeCo)

- DeSeCoにおけるキー・コンピテンシーの判断基準
 - 学習可能であること(ある程度は教育可能なであること)
 - 様々な文脈における重要で複雑なニーズを満たすために役立つこと
 - 誰にとっても重要であること
 - メタ認知など高次なスキルを含むこと
 - 社会的に高い価値が認められる結果につながること
 - 個人レベルの成果: 雇用、収入、健康、安全、政治参加、知的資源の獲得、社会的ネットワーク、文化活動への参加など
 - 社会レベルの成果: 経済的生産性、民主主義的プロセス、連帯、社会的結束、人権、安全、公平、平等、持続的環境など

- キー・コンピテンシーの特定には一定の価値判断が不可避
 - 価値判断のベースになるのは、社会経済的・文化的なコンテクスト
 - 出発点として、一定の規範が必要。DeSeCoの場合には、国際的な条約や協定を活用した(例えば、国際人権宣言やリオ環境宣言など)
 - 一般的に考えられる「良い生活(Good life)」を送るためには、
 - 他者との良好な関係
 - 自己や自己の世界についての理解
 - 自分の置かれている物理的・社会的環境との自律的な関係構築
 - 達成感や楽しさ

が重要で、普遍的とも言える概念。



1. コンピテンシーとは何か

- i. これまでの議論の整理
～DeSeCoに関するD. Rychenの考察を中心に
- ii. OECDにおける最新の議論
～Education2030における議論～

2. コンピテンシーとカリキュラム

- i. “Intended Curriculum”の側面
- ii. “Implemented Curriculum”の側面
- iii. “Attained Curriculum”の側面

– DeSeCo キー・コンピテンシー(1997-2003)

- PISAの理論的背景
- 「21世紀型スキル」、「21世紀型コンピテンシー」

– 「コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへ」

- NZ (2007)
- Australia (2010)
- Singapore (2010)
 - Teach Less, Learn More (TLLM) initiative since 2005
- Korea(2015)
- Japan(2017)
 - 1999年改訂では総合的な学習の時間を導入し、内容も大幅精選

– Education 2030 (2015-present)

13

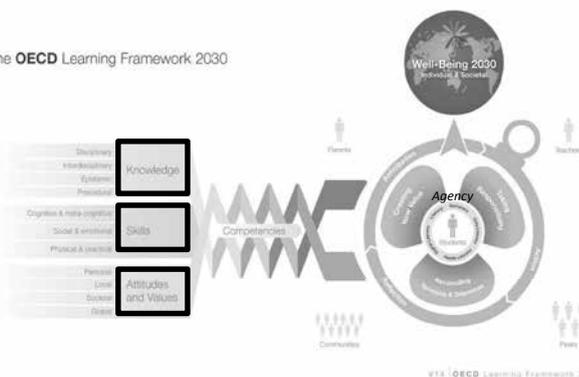
• DeSeCo見直しの背景

- 理論的・抽象的に過ぎる
- 研究者中心での策定
- 特定の国による参加・・・日本は？
- AIの普及、移民の急増など急速な社会変化



Figure 1. The OECD Learning Framework 2030: Work-in-progress

The OECD Learning Framework 2030



16

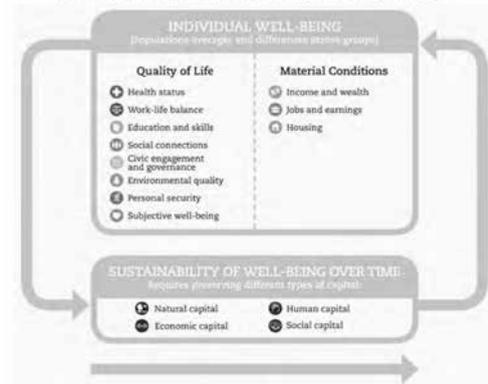
• Education2030 ラーニングコンパスの構造

- ① Well-being (Individual and Societal)
- ② Transformative competencies
- ③ Core foundations
- ④ Three domains (KSAV)
- ⑤ AAR Cycle
- ⑥ Agency

“A competency is more than just knowledge and skills. It involves the determination and the ability to identify, select and mobilize knowledge, skills, attitudes and values to address competently diverse challenges and demands in a particular context.” (OECD Glossary)

Well-being

Figure 2. The OECD framework for measuring well-being and progress



Three domains (KSAV)

- Knowledge
 - Disciplinary
 - Interdisciplinary
 - Epistemic
 - Procedural
- Skills
 - Cognitive and meta-cognitive skills
 - Social and emotional skills
 - Practical and physical skills
- Attitudes
 - Attitudes are underpinned by values and beliefs and have an influence on behavior (UNESCO IBE, 2013). It reflects a disposition to react to something or someone positively or negatively and attitudes can vary according to specific contexts and situations (Haste, 2018).
- Values
 - Personal
 - Social
 - Societal
 - Human

Core Foundations

- Three key foundations:
 - cognitive foundations, which include literacy and numeracy, upon which digital literacy and data literacy can be built
 - health foundations, including physical and mental health, and well-being
 - social and emotional foundations, including moral and ethics
- These core foundations are the building blocks upon which context-specific competencies for 2030, such as financial literacy, global competency or media literacy, can be developed.
- They also form the basis of transformative competencies, which can be transferred across a wide range of contexts.

Transformative competencies

Transformative competencies is the types of knowledge, skills, attitudes and values students need to transform society and shape the future for better lives. These have been identified as following;

- Creating new values
- Reconciling tensions and dilemmas
- Taking responsibility

AAR cycle

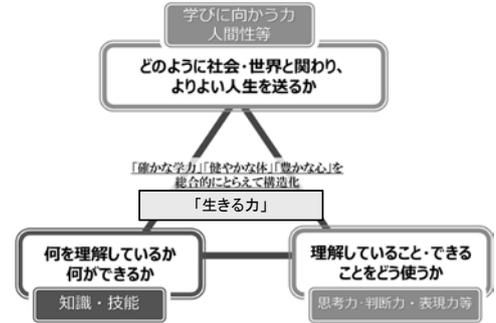
AAR cycle is an iterative learning process whereby learners continuously improve their thinking and act intentionally and responsibly in the interest of collective well-being.

- Action
 - The next phase is where learners take **action** towards well-being.
- Anticipation
 - In the **anticipation** phase, learners use their abilities to anticipate the short- and long-term consequences of actions, understand their own intentions, and the intentions of others, and widen their own and others' perspectives.
- Reflection
 - In the **reflection** phase, learners improve their thinking, which leads to deeper understanding and better actions towards well-being. Every day people take decisions with more or less awareness and understanding.

Agency

- “Student agency” implies a sense of responsibility as students participate in society and aim to influence people, events and circumstances for the better. Agency requires the ability to frame a guiding purpose and identify actions to achieve a goal. It is about acting rather than being acted upon; shaping rather than being shaped; and making responsible decisions and choices rather than accepting those determined by others.
 - Student agency is not a personality trait; it is something malleable and learnable. The term “student agency” is often mistakenly used as a synonym for “student autonomy”, “student voice” and “student choice”; but it is much more than these concepts. Acting autonomously does not mean functioning in social isolation, nor does it mean acting solely in self-interest. Similarly, student agency does not mean that students can voice whatever they want or can choose whatever subjects they wish to learn.
 - 「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」(中等教育資料H30.5月号)
 - 将来的な目標を見据える力
 - 批判的思考力
 - 現状に疑問を持つ力 等
- × オートノミー
△ 主体性

資質・能力の3つの柱



中教審答申(H28.12抜粋)

「知識や技能は、思考・判断・表現を通じて習得されたり、その過程で活用されるものであり、また、社会との関わりや人生の見通しの基盤ともなる。このように、資質・能力の3つの柱は相互に関連しあいながら育成されるものであり、資質・能力の育成は知識の質や量に支えられていることに留意が必要である。」

大学において育む「士力」

- 知識・理解
- 汎用的能力* (コミュニケーションスキル、教養的スキル、問題解決能力等)
- 創造的思考力と、それを支える統合的な学習経験
- 態度・志向性 (自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任等)

出典 学士課程教育の構築に向けて(答申)(平成20年12月)

高大接続改革[学力の3要素]

- ① 知識・技能の確実な習得
- ② ①を基にしつつ、思考力・判断力・表現力
- ③ 主体性を持って多様な人と協働して学ぶ態度

出典 高大接続システム改革会議「最終報告」(平成28年3月)

学習指導要領改訂における「資質・能力の3つの柱」

- ① 生きて働く「知識・技能」の習得
- ② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性など」の涵養

出典 学習指導要領(平成29年3月)

*汎用的能力とは「汎用的技能」とされているが、ここで整理されているコミュニケーションスキルや教養的スキル等は、個々の身体的動作や器械の取扱い等に関わる個別の技能とは異なる、統合的な力のことであるので、教育における資質・能力に関する議論の進展も踏まえ、本スライドでは「汎用的能力」としている。

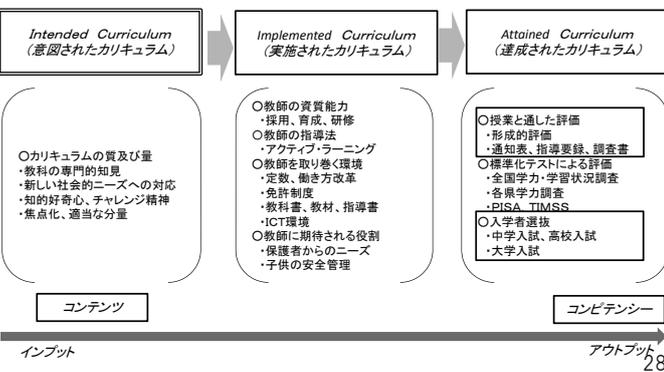
1. コンピテンシーとは何か

- これまでの議論の整理
~DeSeCoに関するD. Rychenの考察を中心に
- OECDにおける最新の議論
~Education2030における議論~

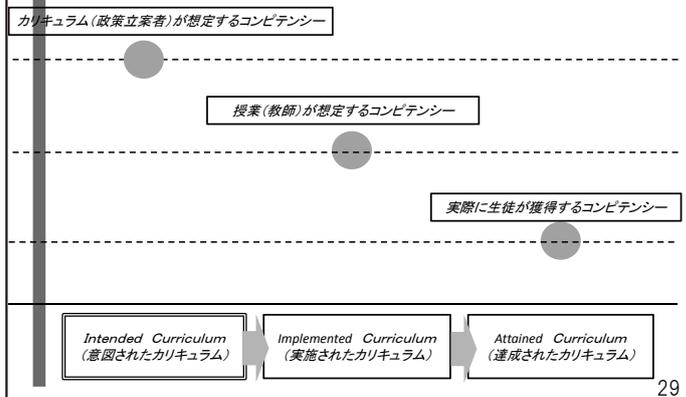
2. コンピテンシーとカリキュラム

- “Intended Curriculum”の側面
- “Implemented Curriculum”の側面
- “Attained Curriculum”の側面

コンピテンシー育成に向けたカリキュラムの考え方



Gaps between three dimensions of a curriculum



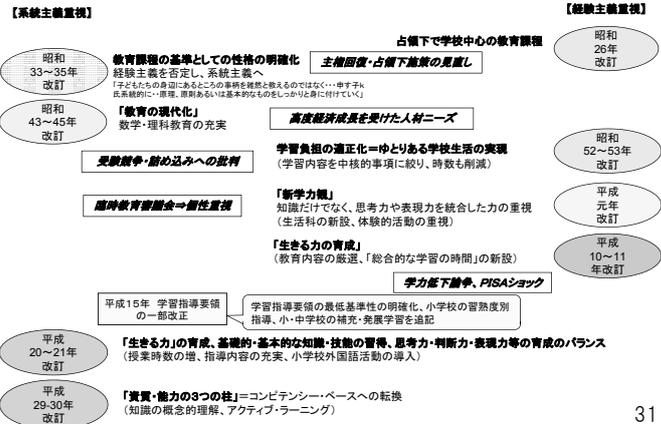
1. コンピテンシーとは何か

- i. これまでの議論の整理
～DeSeCoIに関するD. Rychenの考察を中心に
- ii. OECDにおける最新の議論
～Education2030における議論～

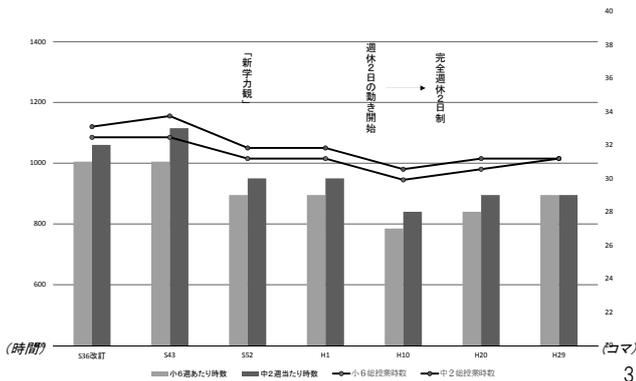
2. コンピテンシーとカリキュラム

- i. “Intended Curriculum”の側面
- ii. “Implemented Curriculum”の側面
- iii. “Attained Curriculum”の側面

カリキュラムの振り子現象と社会的背景



学習指導要領における総授業時数及び週当たり授業時数の推移(小6・中2の例)



キャリア教育、AIリテラシー、環境教育、人権教育、地域・郷土教育、国際理解教育、主権者教育、消費者教育、情報モラル教育、放射線教育、伝統文化教育、スマホ教育、ICT教育、プログラミング教育、データリテラシー、平和教育、性教育、LGBT教育、STEAM教育、食育、健康教育、安全教育、知的財産教育、租税教育、金融教育、法教育、防災教育、海洋教育、アントレプレナーシップ、交通安全教育、多文化共生教育、NIE(新聞活用)教育、オリンピック・パラリンピック教育…ヒアリ教育

Common challenges about curricula across countries

- Curriculum overload
- Effective implementation
- Quality content
- Ensuring equity
- Time-lag dilemma

(OECD Education 2030 projectより)

1. コンピテンシーとは何か

- i. これまでの議論の整理
～DeSeCoIに関するD. Rychenの考察を中心に
- ii. OECDにおける最新の議論
～Education2030における議論～

2. コンピテンシーとカリキュラム

- i. “Intended Curriculum”の側面
- ii. “Implemented Curriculum”の側面
- iii. “Attained Curriculum”の側面

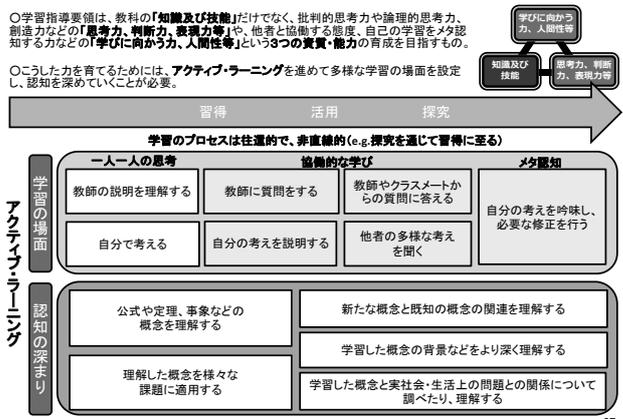
「アクティブ・ラーニング」

- × 「アクティブ・ラーニング vs 一方向型授業」
- × 「アクティブ・ラーニング = 対話型授業」
- 「アクティブ・ラーニング
= 教科の深い理解につなげるための、児童生徒の状況を踏まえた柔軟な授業デザイン」

資質・能力を身に付けるための学習場面と認知の深まり

○学習指導要領は、教科の「知識及び技能」だけでなく、批判的思考力や論理的思考力、創造力などの「思考力、判断力、表現力等」や、他者と協働する態度、自己の学習をメタ認知するなどの「学びに向かう力、人間性等」という3つの資質・能力の育成を目指すもの。

○こうした力を育てるためには、**アクティブ・ラーニング**を進めて多様な学習の場面を設定し、認知を深めていく必要がある。



アクティブ・ラーニングの本質

- **アクティブ・ラーニングを実現するためには、**
 - △ **対話型・グループ型授業の導入**
 - **教師が教育専門家としての専門性を磨くこと**
- 具体的には、
 - ①児童生徒理解についての専門性
 - ②教科等についての専門性
 - ・「見方・考え方」

「見方・考え方」(小学校学習指導要領社会科解説編)

「社会的な事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」

「『社会的な見方・考え方』は社会的な事象等を見たり考えたりする際の視点や方法であり、時間、空間、相互関係などの視点に着目して事実等に関する知識を習得し、それらを比較、関連付けなどして考察・構想し、特色や意味、理論などの概念等に関する知識を身に付けるために必要となるものである。」

「…深い学びの実現のためには、『社会的な見方・考え方』を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。」

1. コンピテンシーとは何か

- i. これまでの議論の整理
～DeSeCoに関するD. Rychenの考察を中心に
- ii. OECDにおける最新の議論
～Education2030における議論～

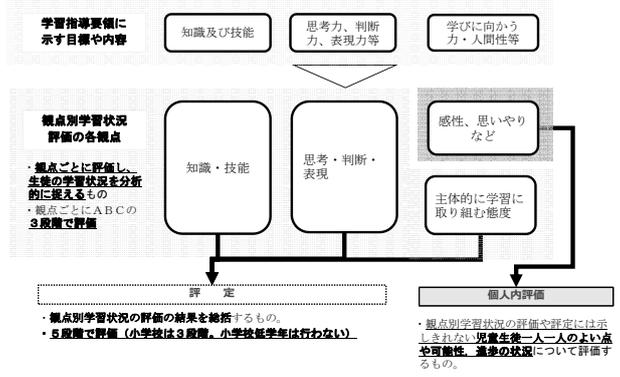
2. コンピテンシーとカリキュラム

- i. “Intended Curriculum”の側面
- ii. “Implemented Curriculum”の側面
- iii. “Attained Curriculum”の側面

新学習指導要領に基づく評価の基本構造

・各教科における評価は、学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして学習状況を評価するもの(目標準拠評価)

・したがって、目標準拠評価は集団内での相対的な位置づけを評価するいわゆる相対評価とは異なる。



学習評価に関する高校生等の意見

「先生方の負担は増えると思うのですが、学校の授業内でも、テストの際だけでもいいので、どういふ点がよかった、どういふ点をもう少し頑張っておほしい、という一言だけでも毎回頂ければ、自分を向上させるための一つのきっかけになると考えます。」(新社会人)

「通知表で数字だけ示されても分からないので、中身をもっと提示してほしいと思います。(観点別評価ではなく)数字での評価だけでは、そう評価された理由を推測することしかできないということがあります。」(高等学校三年生)

「私の通っていた高校では授業中に寝たらマイナス1点、発言したらプラス1点といったように、学力とは直接関係のないことをポイント化して評価を付けているという現状がありました。...これだと、能力がある子ではなく、真面目に授業を聞く子、それから、積極的に発言する子というのが評価されてしまいますので、それらを意欲として評価し、それによって評定値を上下させるというのは、評価の正当性に欠けていると思います。関心・意欲・態度という観点でポイントを付けたとしても、それは科目に対する意欲ではなく、授業に真面目に取り組むという意欲なので、本来評価するべき点とすり替わってしまっていると、私は思っていました。」(大学一年生)

42

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

・「関心・意欲・態度」の評価の課題

・この観点のみを取り出した評価は不適切(観点相互の関係性、「CCA」「AAC」の問題)

・①(粘り強く取り組む側面)と②(学習を調整しようという側面)の両方を評価

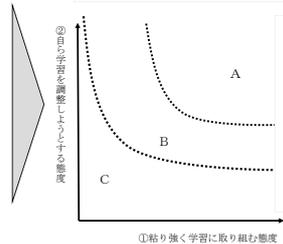
43

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ(案)

児童生徒の学習評価の在り方について(これまでの議論の整理について)より(抜粋)

○「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面と、②①の粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしている側面という二つの側面が求められる。」とされている。

○これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられる。例えば、自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。



44

中央教育審議会の学習評価に関する報告より(抜粋)

「これまで、評価規準や評価方法等の評価の方針等について、必ずしも教師が十分に児童生徒等に伝えていない場合があることが指摘されている。しかしながら、どのような方針によって評価を行うのかを事前に示し、共有しておくことは、評価の妥当性・信頼性を高めるとともに、児童生徒に各教科等において身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージをもたせる観点からも不可欠であるとともに児童生徒に自らの学習の見通しをもたせ自己の学習の調整を図るきっかけとなることも期待される。また、児童生徒に評価の結果をフィードバックする際にも、どのような方針によって評価したのかを改めて共有することも重要である。」

「なお、評価については、記録を集めることに終始して、学期末や学年末になるまで必要な指導や支援を行わないまま一方的に評価をするようなことがないようにしなければならない。」

「なお、例えば、地域のスポーツクラブにおける活動や各種の習い事、趣味に関する活動等、児童生徒が学校外で行う多様な活動については、必ずしも教師が把握することが求められるものではなく、在籍する学校における評価の対象になるものではない。そのため、こうした事項については、同じ資格等であっても、学校によって指導要録や調査書への記載の有無が異なる等の指摘もある。生徒が在籍する学校から提出される調査書は、あくまでも学校における活動の記録であることに留意した上で、入学選抜を行う高等学校や大学等は、これに過度に依存することなく、生徒一人一人の多面的・多角的な姿を考慮するよう、本人からの提出書類、申告等を通じて確認するなどの工夫が求められる。」

(中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」)